



三徳山三佛寺所蔵鸚鵡文銅鏡の調査

三徳山三佛寺に所蔵されている鸚鵡文銅鏡の、考古学的調査と非破壊調査をおこなった。非破壊調査の蛍光X線分析により、高錫青銅鏡であることが明らかになった。

本文 22 頁参照 (撮影: 栗山雅夫)

ファンティンズ修道院遺跡群を含む スタッドリー王立公園

自然の小川と木立、よく管理された芝地、そして修道院の廃墟が美しい風景を創り出すこの庭園は、地域住民の日常的な余暇資源として、また観光資源として活用され、年間 34 万人の人々が訪れる。

本文 40 頁参照 (撮影: 小野健吉)



列点を刻した土器

平城京左京二条大路 SD5100 出土土師器の内面には円形の列点記号が刻されている。現代韓国のユンノリという遊戯の盤面との共通性および『万葉集』の用字の検討から、この列点記号はユンノリに似た奈良時代の盤上遊戯の盤面の可能性が考えられる。本文 50 頁参照 (撮影: 中村一郎)



図版 2



法華寺旧境内出土施釉磚

法華寺旧境内の調査で施釉磚が出土した。ヘラ状工具により水波文を施した緑釉磚、刻線文を施した黄釉と緑釉の二彩磚、無文の緑釉磚の3種類が認められる。刻線文磚は平城京内でも類例はほとんどみられない。水波文緑釉磚の裏面にはヘラ書きの番付がみられ、他の施釉磚とともに須弥壇を飾ったと思われる。

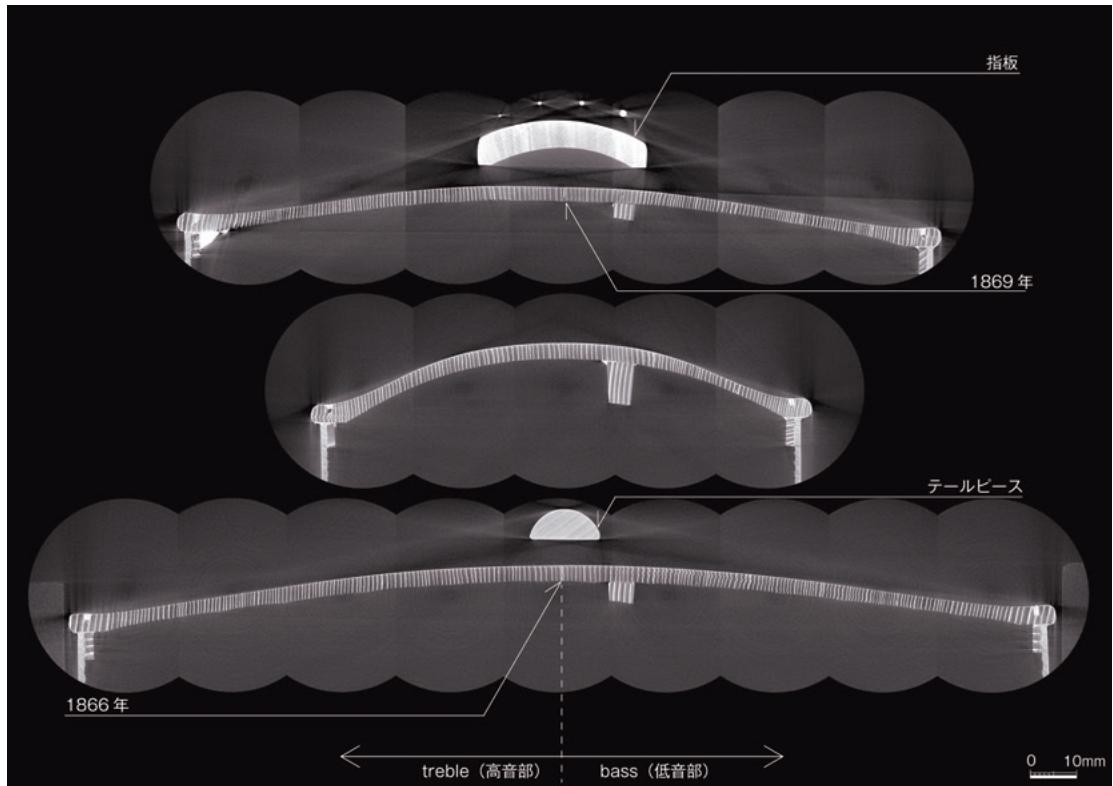
本文 58 頁参照（撮影：中村一郎）



香川県安造田東3号墳出土モザイク玉

安造田東3号墳出土のモザイクガラス玉（香川県まんのう町教育委員会所蔵）について、各種の自然科学的手法を用いた材質・構造調査を実施した結果、ササン系の植物灰ガラス製であることが明らかとなる等、本資料の生産地を推定するうえで重要な結果が得られた。写真下右端は白線部に含まれる白色粒子の拡大写真。

本文 68 頁参照（撮影：田村朋美）



年輪年代学的視点から見た
黎明期国産ヴァイオリンの木材利用

マイクロフォーカス X 線 CT 装置を用いて、ヴァイオリンの表板の部分を木口断面で撮像したもの。表板にはアカエゾマツが使用されていて、アカエゾマツを含むトウヒ属の特徴である樹脂道が散見される。また、指板やテールピースにはエボニー（黒檀）が使用されていて X 線の吸収が多いため、表板よりも白っぽく描写されている。写真は、最新の年輪年代の得られた MSvn001 の個体で、上から順に upper, middle, lower の各断層面。

本文 74 頁参照（撮影：大河内隆之）

向原寺所蔵金銅観音菩薩立像の調査

豊浦寺の後身とされる向原寺に伝わる観音菩薩立像。頭部は飛鳥時代後期の金銅仏、その他の補作部分は江戸時代の金銅仏として貴重な資料である。

本文 80 頁参照（撮影：井上直夫）



図版 4



檜隈寺瓦窯の調査（飛鳥藤原第 181-4 次）

檜隈寺の立地する丘陵の北西斜面で検出した瓦窯。地盤を掘り込み、空焚きをおこなって窯体とし、瓦を効率的に焼成するため 4 条の畦を設けた有畦式平窯である。10 世紀ごろに短期間操業したとみられ、平安時代におこなわれた檜隈寺の補修に関連するものと推定した。北西から。

本文 135 頁参照（撮影：栗山雅夫）



藤原宮大極殿院の調査（飛鳥藤原第 182 次）

調査地は大極殿院南門のすぐ北側にあたる。藤原宮期の礫敷広場を広く確認したほか（写真右側）、宮造営期の先行条坊側溝、南北溝・斜行溝などを検出し、古墳周溝の発見もあった。調査区西半では奈良時代から平安時代までの遺構群も確認し、土器埋納坑 2 基も見つかった。南東から。

本文 86 頁参照（撮影：栗山雅夫）

藤原宮東方官衙北地区的調査（飛鳥藤原第 183 次）

東方官衙北地区的南西部における調査。2012 年の第 175 次調査で一部を検出していた、官衙地区で初となる礎石建物の全体を検出したほか（写真手前）、調査区西側では床張りとみられる大型の掘立柱建物を検出し（写真右奥）、これらが大極殿の東方に直線的に配置されていることが判明した。北東から。

本文 97 頁参照（撮影：栗山雅夫）



先行東一坊大路 SF3499 と
それに先行する道路 SF11320

重複する二条の南北道路を検出した。内側にのびる二本の南北溝を両側溝とする道路 SF11320 を埋め立てた後に、道路幅の拡幅をともなって、外側の南北溝を両側溝とする先行東一坊大路 SF3499 が造られた。北から。

（撮影：栗山雅夫）

大型掘立柱建物 SB11300

調査区の西端で検出した大型掘立柱建物。柱穴は一辺が 1.5 ~ 1.9 m と巨大である。側柱の内側には梁行方向に 8 尺等間でならぶ内部柱穴も確認し、この建物が床張りであったことがわかった。西から。

（撮影：飯田ゆりあ）



図版 6



平城宮第一次大極殿院広場の調査（平城第 520 次）

西宮（奈良時代後半）にともなう全面に広がる礎敷きや幢旗遺構などを検出した。第 72 次調査の成果と合わせて、東西 7 基の柱穴が 2 列並ぶことがあきらかになった。南西から。本文 142 頁参照（撮影：中村一郎）

幢旗柱穴

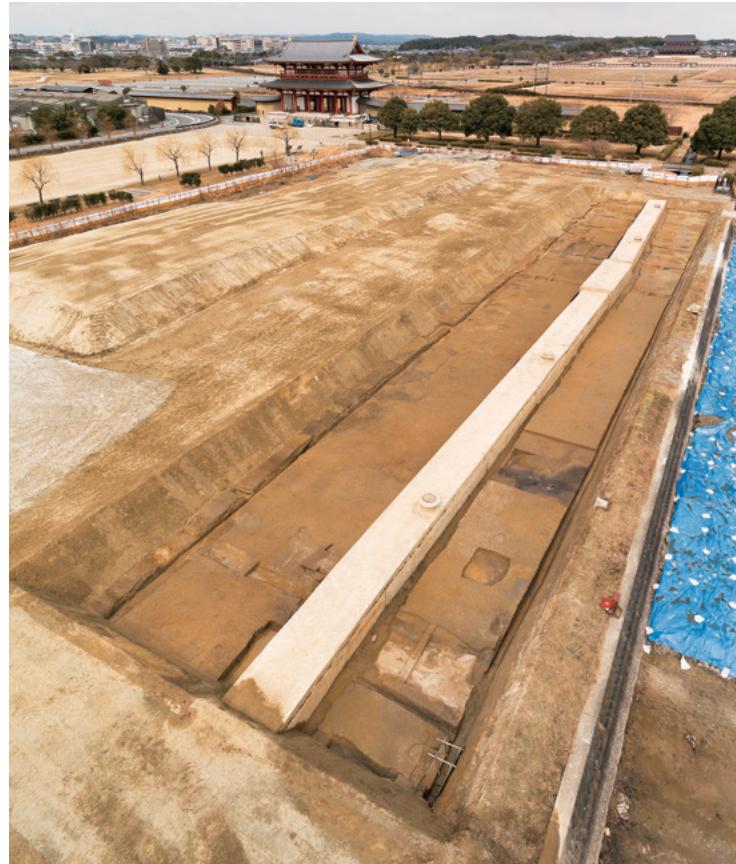
幢旗の柱穴断面。一つの横長の柱穴に 3 本の柱が約 1 m 離して立てられていた。この 3 本の柱による構造は『文安御即位調度図』に描かれた宝幢・四神旗と同じである。北から。

（撮影：中村一郎）

平城京左京三条一坊一坪の調査（平城第 522 次）

平城宮より朱雀門を出て南東すぐの坪の、東辺付近の調査。遺構密度の低さからこの坪が広場的な利用をされていたことを改めて確認し、また坪内道路の東延長部分を検出するなど、既往の調査による知見を裏付ける成果を得た。南東から。

本文 160 頁参照（撮影：中村一郎）



中山瓦窯の調査（平城第 523 次）

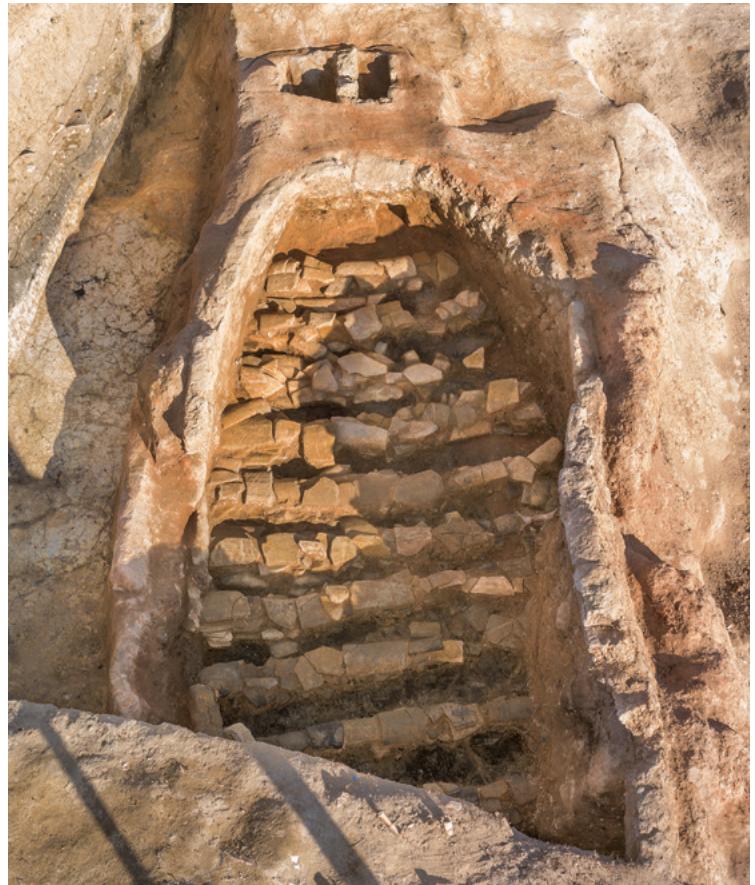
奈良山丘陵上にある中山瓦窯の発掘調査で 3 基の瓦窯を検出した。いずれも窯窓で、奈良時代前半のものである。写真は SY340。焼成室と煙道が良好な状態で残存していた。西から。

本文 168 頁参照（撮影：鎌倉 綾）

中山瓦窯出土鬼瓦

本調査からは鬼瓦が 5 点出土した。いずれも鬼瓦 I A 式で、特に SY340 からは良好な残存状態の鬼瓦が出土した。

（撮影：中村一郎）



平城京左京二条二坊十一坪の調査（平城第 533 次）

全景写真。奈良時代は少なくとも 3 時期以上の遺構変遷が確認でき、正殿や脇殿がある中枢部以外でも建物群が複雑に展開する状況が確認できた。南から。

本文 195 頁参照（撮影：杉本和樹）



第 533 次調査で出土した三彩瓦

調査区からは施釉瓦が多く出土した。施釉瓦は主に平瓦、丸瓦、熨斗瓦からなり、単彩と三彩、二彩がある。

（撮影：中村一郎）



図版 8



興福寺西室の調査（平城第 540 次）

西室北辺の調査を実施し、礎石建物 SB10450 と掘立柱建物 SB10440 を検出した（奥の礎石露出部分）。また、その西方では中近世の遺構群を確認した（手前）。西から。

本文 212 頁参照（撮影：栗山雅夫）

興福寺北円堂南面の調査

（平城第 540 次）

灯籠の据付痕跡と考えられる小土坑を 3 基確認した。据付穴には玉石が充填されていた。北から。本文 212 頁参照（撮影：栗山雅夫）

興福寺北円堂回廊の調査（平城第 540 次）

北円堂院の北面回廊の基壇外装および一部の礎石抜取穴を検出した。基壇の北方は後世の廃棄土坑によって削平されていた。南西から。

本文 212 頁参照（撮影：栗山雅夫）

